

6.23 金 第413回 定期演奏会

長野俊樹(音楽学、福岡教育大学名誉教授)

ジョン・アダムズ(1947-)

ショート・ライド・イン・ア・ファスト・マシン

ジョン・アダムズはアメリカ合衆国マサチューセッツ州の出身。ハーヴァード大学で作曲を学び、1970年代からミニマル・ミュージックの手法をベースに、独自の世界を開拓してきている。現在、世界で最も注目されている作曲家のひとりである。

ミニマル・ミュージックというのは、ミニマル=ごく小さな音の動きやリズムを何度も何度も反復しながら、微細な要素を追加したり、パート間のズレを生じさせたり、新しいパターンを参入させたりなどして、響きや音色を徐々に変化させ、ダイナミズムを生み出していく音楽表現のことである。テリー・ライリー(1935-)やスティーヴ・ライヒ(1936-)、フィリップ・グラス(1937-)などが、その代表的な作曲家とされる。

アダムズはそうした純然たるミニマル・ミュージックの作曲家たちと異なり、それ以外の様々なスタイルをも結び合わせて表現の可能性を広げてきている。

《ショート・ライド・イン・ア・ファスト・マシン》(速い機械にちょっと乗る)は1986年の作曲。ミニマル・ミュージックを基盤にしたアダムズの典型的な表現を、圧縮的にわかりやすくまとめた作品になっている。彼自身は「とんでもなく速いスポーツカーに乗せられて、誘いを断るべきだったと後悔する状況」と発言しているが、逆にこの曲の調子が肯定的・開放的であるのは、ピツツバーグ交響楽団から一種のファンファーレとして委嘱されたためだろう。わくわくするような感覚に貫かれている。

4つの部分からなり、第1~3部はウッドブロックがペースメーカーの役割を果たす。第1部と第3部は高音のウッドブロックで、オーケストラ全体も高音域を強調した明るい響き、第2部は低いウッドブロックに代わり、全体の響きも低音域中心の少し沈んだ感じ。第4部で

はウッドブロックが外れ、トランペットが中心的な旋律を吹く。

作曲／1986年 初演／1986年6月13日、マサチューセッツ州マンスフィールド、マイケル・ティルソン・トーマス指揮ピツツバーグ交響楽団 編成／ピッコロ2、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット4、ファゴット3、コントラ・ファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、太鼓、吊るしシンバル、シズルシンバル、小太鼓、ウッドブロック、タンパリン、トライアングル、タムタム、シロフォン、グロッケンシュピール、クロティル、シンセサイザー2、弦5部
使用楽譜／ブージー&ホークス

サミュエル・バーバー(1910-81)

ヴァイオリン協奏曲 作品14

サミュエル・バーバーはアメリカ合衆国ペンシルベニア州出身。20世紀生まれの作曲家だが、急進的な様式や実験的な方法をとらず、保守的・伝統的な作風である。ときには例外的に、無調などを用いることもあるけれど。

おそらく彼のもっとも有名な作品は《弦楽のためのアダージョ》であろう。これは1936年作《弦楽四重奏曲第1番》第2楽章の弦楽合奏用編曲版である。様々な映画などで使われてきたから、ご存じの方も少なくないでしょう。

バーバーの《ヴァイオリン協奏曲》は、1939年にフィラデルフィアの実業家サミュエル・シメオン・フェルズからの依頼により、同年から翌年にかけて作曲された。

第1楽章 Allgro moderato(ほどよく速く) ト長調 4/4拍子。

いきなり冒頭から独奏ヴァイオリンによって中心主題が提示される。なんとロマンティックな、なんと甘く美しい。続いて、クラリネットできびきびとした副次主題が奏される。これもなかなか魅力的である。楽章全体はソナタ形式を下敷きにした構成であり、中心主題と副次主題がほぼ交替に現われ、展開される。さながら愛をテーマにしたミュージカルの一幕。ヒロインの身ぶりが目に見えるようだ。

第2楽章 Andante(ゆっくりと) ホ長調 6/4拍子。

三部形式——ひそやかな慰め(主部)、峻厳な孤独(中間部)、そしてもういちど慰め。

第3楽章 Presto in moto perpetuo(急速に、無窮動=間断なき運動で)、イ短調?、4/4拍子。

A—B—A—C—A—終結部。難技巧の独奏ヴァイオリンだけでなく、オーケストラにも注目してください。Cや終結部では、第1楽章副次主題の断片を聴きとることができる。前の2つの楽章とは打って変わり、強風が吹きぬける。

作曲／1939～40年 初演／1940年、フィラデルフィア、ハーバート・ボーメルの独奏、フリッツ・ライナー指揮カーティス音楽院管弦楽団 編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、スネアドラム、ピアノ、独奏ヴァイオリン、弦楽5部 使用楽譜／シャマー

アーロン・コープランド(1900-90) 交響曲 第3番

アーロン・コープランドはニューヨークのブルックリンで生まれた。17年から本格的な音楽教育を受け、21年からはパリに留学。25年に帰国し、その後60年間近くにわたり、アメリカ音楽の発展に重要な足跡を残した。

コープランドの《交響曲第3番》は44～46年に作曲された。彼自身の《市民のためのファンファーレ》にもとづく作品である。この《ファンファーレ》は、シンシナティ交響楽団の演奏会を開幕する音楽として依頼され、42年に作曲されていた。

《交響曲第3番》における各楽章の主要な主題は《ファンファーレ》の主題動機と関連しており、また両者はひとつの精神的基盤を共有している。それは、当時は愛国的な心情の反映だったのだろう。しかし、"いま"グローバルな視点から耳を傾けるとき、その表現は、精神の輝かしい側面に光をあてた、力強い人間讃歌となっているようと思える。

第1楽章 Molto moderato, with simple expression(十分に節度をもって、素朴な表現で)、4/4拍子で静かに始まる。第1主題が受けわたされながら盛りあがった後、第2主題がトロンボーンからホル

ンへと現われる。悠揚たる歩みでクライマックスに至り、第1主題が再現。再び静けさへと溶け入る。2つの主題は《ファンファーレ》の主題による。

第2楽章 Allegro molto(きわめて速く)、2/2拍子で始まる。三部形式。《ファンファーレ》の主題を連想させる動機にもとづく主部と、3拍子で舞曲風の中間部。再現部では主部と中間部の主題が統合される。

第3楽章 Andante quasi allegretto(ややゆっくりだが「やや速く」のように)とされた瞑想的な音楽で始まる(この旋律も《ファンファーレ》の主題の骨格)。いったん盛り上がった後、少し速めた3/4拍子になり、フルートでこの楽章の中心主題が提示される。この主題は絶え間なく変容を続け、テンポを速め、音楽を活発化させる。最後に瞑想的な部分が再現し、休みなく次の楽章が始まる。

第4楽章 前楽章の最終和音の中から静かに《ファンファーレ》が聞こえてくる。続いて力強く《ファンファーレ》の直接引用。急速で快活な音楽がいくつもの主題によって展開され、終結部では、《ファンファーレ》の主題動機が様々なかたちをとり、様々な楽器間で呼びかわされる、圧倒的なクライマックスとなる。

作曲／1944～45年 初演／1946年10月18日、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮ボストン交響楽団 編成／ピッコロ、フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット、E♭クラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、合わせシンバル、吊るしシンバル、小太鼓、中太鼓、ムチ、トライアングル、ウッドブロック、クラベス、ラチェット、タムタム、アンビル、鐘、シロフォン、グロッケンシュピール、ピアノ、チェレスタ、ハープ2、弦5部 使用楽譜／ブージー&ホークス

※編成は演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。